

---

**@@@@5496421000**

妖気

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

@@@@5496421000

### 【Nコード】

N6219Z

### 【作者名】

妖気

### 【あらすじ】

よろしくお願いします。

タイトル 学園都市都市伝説 【笑い男】

「ねえねえ、友達から聞いたんだけど、笑い男って都市伝説してる？」

放課後、学校の教室で女の子二人が雑談に興じていた。

「知ってる知ってる、最近流行ってるもんねその都市伝説。けどそれがどうしたの？」

学園都市にはこんな噂がある。

【路地裏のファーストコンタクト】

スキルアウト達が路地裏でたむろしていると、一人の中華服の少年がやってきたので適当に金を巻き上げようと絡みました。

そしたらその少年はニタアと口が耳まで裂けて笑いだしました。

その声は地獄の底から手招きしている亡者のようで、そこにいたスキルアウトは恐怖でパニックになりそのまま失神しました。

どのくらい時間が過ぎたか。スキルアウトの一人が目覚めるとそこには仲間以外は誰もいなかった。

慌てて仲間をゆすり起こすと仲間は何事もなかったかのように起きました。

結局、少年はそれから彼らの目の前に現れることはありませんでした。

ただし、そのスキルアウトはたまに思い出します。あの耳まで口の避けた少年と地獄の底から手招きするような亡者のような笑い声を。

「でも、笑い男と出会ったら耳栓を付ければ笑い男が勝手に逃げていくんだよね。」

耳を塞ぐような仕草をした少女にチツチツと指を振り言う。

「その対策はもう出遅れなんだって知ってる。実は笑い男の話には続きが出来てたんだよ。」

### 【路地裏の笑い男のリベンジ】

笑い男が現れたので耳栓を着けてみたスキルアウト達がいきました。

その瞬間、笑い男は溶けて消えました。弱点を見つけたスキルアウト達は中華服を着た少年が現れるたびに耳栓を付けました。

それから一週間が過ぎました。ある日スキルアウトがたむろしてると中華服の少年が歩いてきました。

スキルアウトたちはすぐに耳栓を着けました。それを見て少年がニタアと耳まで裂ける口で笑うと、背中に手をまわしました。

スキルアウト達は笑い男を倒そうと手に武器を持って近づきました。そしてスキルアウト達は見ました。

笑い男が背中から奇妙な形の笛を出しました。そして笑い男は笑いしました。

耳栓をしているはずなのに聞こえるおぞましい笑い声にスキルアウト達は何故か恐怖で周りが見えなくなりそのまま気を失いました。

「・・・悔しかったんだね、その笑い男。でも、話を聞くだけじゃただ笑ってるだけの男のようだから奇襲とかで倒せばいいんじゃない？」

その当然の質問に話し手だった女子生徒は『えー』と言う。

「知らないの、笑い男って直感みたいな物が鋭くて不意打ちや奇襲、遠距離からの狙撃をことごとく避<sup>か</sup>わすんだよ。」

初耳な言葉に驚きながらふと女子生徒は思い出す。

「そういえばこのクラスにも中華服の少年がいるよね。そいつが笑い男だったりして。」

「えー、ファンフェン君にかぎってそれは無いなあ。」

「いや、常に中華服を着ていて最近は拡声器を持ち歩いてるからあり得る話だよ。」

自信満々に言う女子生徒。その態度を見ながらやはり否定的な意見を述べる女子生徒。

今日も学校は平和であつた。

「ハハッ、笑いすぎた。まったく路地裏を歩くだけでこんなに一苦  
労とは。」

遠くに拡声器を向けて笑いまくった少年、<sup>エイファンフェン</sup>嬰鳳飛はのど飴を一口  
の中を含みながら状況を整理してみる。

敵意と殺意を向けられたと感じたから拡声器を向けて横にステップ  
しながら笑った。

次の瞬間には複数の銃弾が飛んできた。だからその後しばらく笑い  
続けた。

「笑い男の都市伝説ってこんなにも広がっているとは、鄙人は何か  
後戻りできないことをしちゃった気がする。」

・・・鄙人以外で中華服を着てるやつ、<sup>バオチエン</sup>?不起。

事のきつかけは路地裏を歩いていたらスキルアウトに絡まれたから  
能力【<sup>フィアーアクター</sup>笑音恐怖】を使って逃げただけである。

そして気付いた時には都市伝説というトンデモな事になってしまった。

「はあ、学園都市は安全だから抗争が終わるまで向こうで朋友バンヤオでも作って

楽しく過ごしなさいと言われたから来たのに、これじゃあ向こうでマフィア相手にドンパチやってる生活の方がまだ楽しかったよ。

物騒な事を言っているがこれが学園都市レベル4の超能力者、【笑フイ音恐怖アイアクター】が学園都市に来る前の普通の少年だったころの生活だったりする。

昔を思い出し溜息を吐きながら口の中のど飴を放り込む。やっぱりのど飴はハツカに限る。

「ようやく、見つけた。」

いきなり後ろから声を掛けられた。その声にびっくりしてしまった。

「ハハツ、鄙人、一瞬心臓に釘が刺さったかと思った。後ろから敵意や悪意なく声をかけるな、びっくりするじゃないか。」

理不尽な事を言いながら後ろを振り向くとそこには男がいた。その男は、ファンフェンに早々と要件を言った。

「笑い男、頼みがある。仇を取ってくれ。」

「とりあえず、話だけを聞かせてください。」

優しい声色でとりあえず相手の頼みを詳しく聞くことにしてみた。

「ハハツ、鄙人に化け物を倒せと言うのですか。ちょっとそれは無理ですね。」

素直に断ることにした。正直言って暗部に関わる気はないのである。「頼む、レベル5を倒し、なおかつ暗部に関わってない一般人であるお前にしかお願いできないんだ。」

「ごめん、レベル5を倒した記憶がないんですけど。」

「路地裏で失神する前に笑い声が聞こえたと言っていたレベル5の女の子がいたんですけどお前ではないのですか。」

「・・・さいですか。」

女の子、巻き込んでしまつて？不起。バオチエン

「ちなみにその後に女の子の知り合いの男の人が笑い男をぶち殺してやると息巻いてましたよ。」

今後路地裏を歩くときは気を付けようと思う。

「それはともかくお願いだ、親友を殺されて俺は今も悔しいし、四季崎樹と倉科モヨコも無念だと思うんだ。ですから仇を取ってくれ。お願いだ!!」

土下座してまでお願いしてくる目の前の善人に溜息を吐いてから優しく声をかける。

「顔を上げてください。分かりました、気が向いた時に仇を取りましょう。」

優しく言つたその言葉に目の前の男はありがとうございますと言つて、そこで思い出したかのようにこう付け足した。

「それと無茶を承知で言うが、殺しは無しの方向でお願いする。俺は親友達を殺した奴が恐怖でパニックになる様をあの世にいる親友たちに見せて少しでも無念を晴らさせたいだけですし、子供に殺人をさせたくはないので。」

本当に善人だよ、この人。なんでこんな人が暗部にいるんだろうか。おそらく人質でも取られてるのかもしれない。

「暗部を抜けたほうがいいですよ、善人さん。」

「それはできません。私が殺さなくても問題無い殺害対象を見逃すだけで救われる多くの命があると思うので。これからも続けていきます。」

「さいですか。まあ、頑張ってください。それと鄙人を見つけたということとは笑い声を聞いていたはずですけど何で平気なんですか。」その言葉に気恥ずかしげに目の前の男は答える。

「俺って生まれつき耳が聞こえなくて、今の会話もお前の口の動きを読み取つての会話だったんですよ。」

「・・・さいですか。」

ファンフェンがこの人には絶対に勝てないと悟った瞬間であった。

こうして、都市伝説である笑い男は仇を取ることにした。気まぐれではあるが、一応約束は守ろうと決意しながら。

（ああ、もしも仇を取る相手が善人だったらどうしようか。）

早くも決意は揺らいではいるが・・・



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6219z/>

---

@@@@5496421000

2011年12月20日21時45分発行